

## 都市部の若者男女における HIV 感染リスク行動に関する研究

H29-エイズ-一般-003

総括研究報告書

研究代表者：日高 庸晴（宝塚大学看護学部 教授）

### 研究要旨

国民一般に HIV 感染症の知識の普及と検査受検勧奨を推進するために、HIV/STI 感染リスクが高いと考えられる性的に活発な男女（10～30 代）や STI 感染不安・クリニック受診者を主たる対象に、インタビュー調査、知識・意識・行動に関する横断調査、それらに基づいた受検勧奨のための啓発プログラムを開発・実施・評価することを視野に、以下の研究課題に取り組むこととする。

研究 1：Web による若者の HIV/STI 感染リスク行動に関する行動疫学研究（日高庸晴）、研究 2：繁華街の若者の HIV/STI 感染リスク行動に関する行動疫学研究（松高由佳）、研究 3：STI 感染不安のある若者の HIV/STI 感染リスク行動に関する行動疫学研究（合田友美）、研究 3 年目は研究 4：性的指向と性自認の多様性に関する全国教員調査（日高庸晴）を追加実施した。

**研究 1：**若者を対象に予防啓発を進める上でインターネットモニターを対象に啓発動画の効果評価を Wait list control による前後比較試験によって行った。HIV/STI 予防啓発に関する 6 つのクイズと解説を主要コンテンツとし、動画視聴あり群においてのみ有意な効果が確認された。

**研究 2：**本研究では、大阪・札幌の繁華街の若者を対象に HIV/STI に関する知識・意識・性行動・検査行動の実態に関する横断調査を実施した（研究 1）。横断調査は昨年度と同地域・同店舗での 2 年連続での実施である。また、大阪の繁華街の若者をターゲットとし、セクシュアルヘルス向上を目的としたキャンペーンとして複数のクラブ店舗で同時多発的にコミュニティ介入を実施した（研究 2）。

研究 1 では、iPad を使用した無記名自記式オンライン質問票により 741 名の有効回答を得た。以下の点について昨年度調査と同様の傾向であることを確認した。①対象者の大半が HIV や検査の正しい知識を有しておらず、特に女性、若年層の知識が低いこと。②過去 6 か月間にセックスした者のうち約 6 割が複数のセックスパートナーを有し、コンドーム常用率が男性より女性において低いこと。研究 2 では、大阪繁華街のクラブ 4 店舗において、HIV/STI 予防啓発介入キャンペーンを 2 日間、同時に開催した（2019 年 12 月）。コンドーム親近感を持たせ予防意識を高めるためのゲーム（2 種）や HIV/STI 予防に関する知識向上を目的としたクイズ（2 種）を実施した。併せて、若者向けの予防啓発メッセージを含めた動画を介入店舗内で繰り返し提示した。のべ 527 名の参加があり、ゲーム後の反応測定などの結果から、これらの目的が概ね達成されたことを確認した。性的に活発な繁華街の若者男女をターゲットとするクラブコミュニティを巻き込んだ予防啓発介入の一モデルを提供した。

**研究 3：**エイズ予防啓発のための基礎資料を得ることを目的に、自治体による HIV/STI 検査の受検者を対象に質問調査を実施し 28,586 人の回答を得、背景要因を探索した。その結果、20 代の占める割合が高く、コンドームの使用率は特に女性に低率であり、10、20 代女性の半数以上は、性交相手とのコンドーム使用に関して話題にしている一方で、約 2 割の女性が、つけて（つけよう）って言えな

いから仕方ないと使用をあきらめており、20、30代女性のコンドーム所持率は顕著に低かった。これらの結果をふまえ、3年目は、代表的な性感染症の種類と性感染症の流行の現状、症状、感染予防策（コンドームの使用、受検）、正しい情報へアクセスするためのサイトを紹介した動画を作成し、視聴前後の知識・認識の変化について150人を対象に検証した。動画の内容について、20代、30代男女の5割以上が親しみやすい、安心できると回答し、役に立った、まあまあ役に立ったと回答した人は、全群で8割を超え、男女共にコンドームの常時所持の必要性について認知を高めた。さらに、性別を問わず梅毒感染者数の急増に関する知識の獲得とコンドームを使うように相手に働きかける（断る）セリフのイメージ化を認め、一定の成果が示唆された。

**研究4：**わが国のHIV感染拡大は主に男性同性間であることから学校でのHIV/STI啓発を実施する際に若者の性的指向や性自認の多様性を理解したうえで予防教育を行うことが求められる。36自治体の教員に性的指向と性自認の多様性に関する質問票調査を行った（有効回答数21,634件）。教育現場で教える必要性を感じる内容は、「男女の体の違い」「第二次性徴」「妊娠・出産」や「薬物乱用」「性感染症」「HIV/AIDS」は9割を超えていたが、「性別違和や性同一性障害」は8割台、「同性愛」は最も低率で6割台の必要性認識であった。一方、同性愛や性自認について授業で取り入れた割合は15%前後であり、必要性の認識割合との乖離が認められた。

研究分担者（分担掲載順）：

松高 由佳（比治山大学現代文化学部 准教授）

合田 友美（宝塚大学看護学部 准教授）

時多発的に介入を実施した（研究2）。

**研究3：**エイズ予防啓発のための基礎資料を得ることを目的に、HIV/STI検査の受検者を対象に質問調査を実施し実態と把握したうえで、質問紙調査の結果をふまえた介入動画を作成し、その効果を測定した。

## A. 研究目的

**研究1：**スマートフォンやインターネットが生活に不可欠なツールとなっている現在、HIV/STI予防のみならず健康教育実施のツールとしてインターネットが役立つと考えられる。Webを用いることによって動画や複雑なプログラムの配信も可能となり、本研究はWebによるHIV/STI予防メッセージの効果評価を行う。

**研究2：**HIV/STIの効果的予防啓発介入に資する基礎的資料をより確かなものにするため、前年度に引き続き、大阪および札幌の繁華街の若者を対象にHIV/STIに関する知識・意識・性行動・検査行動の実態に関する横断調査を行った（研究1）。また、横断調査で明らかになった課題に介入するため、前年度にクラブ1店舗で実施・検証したHIV/STI予防啓発プログラムを改良・拡大し、クラブコミュニティを巻き込んだキャンペーンとして複数のクラブ店舗にて同

**研究4：**小・中・高の教員を対象にHIV/STI予防教育やその根底に必要となる性的指向と性自認の多様性に関する知識・意識についてWebによる質問票調査を追加実施した。過年度の評価委員からの指摘・助言の通り若者対象の予防啓発の促進のためには学校との連携や感染リスク行動の背景理解、疫学状況に基づいた予防教育の実施が求められる。そのためにはLGBTなど性の多様性への配慮が教育現場に不可欠であり、その実態を明らかにする必要があると捉え、2019年9月1日の研究成果発表会（於：東京医科大学）での追加実施の報告の通り、調査の実施を企画立案した。2011年に実施した教員調査の後続研究として位置付けられ、36自治体の教員を対象に行った。

## B. 研究方法

**研究 1:** 予防介入コンテンツをインターネットモニターが視聴することにより、動画の効果評価を Wait list control による前後比較試験によって行った。対象は 18 歳～35 歳の男女、過去 6 ヶ月以内に配偶者・パートナー以外とコンドームを使わない性経験があり、都市部（札幌市・仙台市・千葉県・埼玉県・東京都・神奈川県・名古屋市・京都市・大阪市・堺市・神戸市・福岡市）在住であることとした。動画視聴あり群（男女各 150 人、計 300 人）、対照群（男女各 100 人、計 200 人）に二群化した。クイズ形式の動画の主たるコンテンツは、1) 2018 年は梅毒の年間患者数が 6,000 人を突破した。（正解○）、2) エイズにかかるとすぐに死ぬ（正解×）、3) HIV 抗体検査では、女性の場合は内診（膣の検査）がある（正解×）、4) HIV 抗体検査では、男性の場合ペニスの検査がある（正解×）、5) コンドームを持ち歩くには財布に入れておくのが最も良い（正解×）、6) 選び方次第でコンドームを使ったセックスはもっと楽しく出来る（正解○）とした。

**研究 2:** (研究 1) 昨年度と同店舗（大阪市内 2 店舗、札幌市内 1 店舗）のナイトクラブに入店した 18 歳以上の男女を対象に、タブレット端末を用いたオンライン行動疫学調査を実施した（2019 年 6 月～2019 年 9 月に 6 回、21 時～深夜 1 時まで実施）。調査員が店舗入口付近で入場客をリクルート、研究班の iPad で無記名自記式質問票サイトにアクセスし、約 3 分で回答する手順とした。回答終了者には謝品としてクラブのドリンクチケット（700 円相当）1 枚を手渡した。質問項目は、属性項目、HIV/STI に関する知識、検査の知識、HIV 検査受検経験（生涯）、過去 6 か月間のセックス経験の有無、セックスした相手の性別、人数、種別等、過去 6 か月間のセックス時コンドーム使用状況等で構成した。  
(研究 2) 2019 年 12 月、世界エイズデーに合わせ大阪繁華街のクラブ 4 店舗において、

HIV/STI 予防啓発介入キャンペーンを 2 日間、同時に開催した。予防意識向上を目的としたゲーム（2 種）や HIV/STI 予防に関する知識向上を目的としたクイズ（2 種）を実施し、参加者には謝品としてクラブのドリンクチケット（700 円相当）またはグッズ（コンドーム等）を提供した。ゲーム参加者にはゲーム後の反応評定（ゲームを通じた予防意識の変化）を行った。昨年度までの研究成果や海外での HIV/STI 予防活動に携わる研究者へのヒアリング結果を基に、新たに作成した動画をキャンペーン実施店舗のスクリーンで繰り返し提示した。この動画には、HIV 検査・予防に関する知識、男性の性に関する規範意識向上のためのメッセージを盛り込んだ。

### 研究 3:

#### 1. 調査方法

##### 調査 1: 自治体質問紙調査

性交相手との出会いの経緯や予防に関する行動と認識等の背景要因を探索した。調査対象は、西日本の A 府または A 市自治体における HIV/STI 検査を 2017 年 10 月～2019 年 9 月に受検した人であり、回収数は 28,586 人であった。

##### 調査 2: クリニック介入調査

代表的な性感染症の種類と性感染症の流行の現状、症状、感染予防策（コンドームの使用、受検）、正しい情報へアクセスするためのサイトを紹介した動画を作成し、視聴前後の知識・認識の変化を明らかにするとともに、動画視聴の感想を求めた。調査対象は、C、D クリニックにおける HIV/STI 検査を 2020 年 2 月～3 月に受検した人であり、回収数は 150 人であった。

#### 2. 分析方法

##### 調査 1: 自治体質問紙調査

「性交経験のある」者を限定して、自身の性別、性交相手の性別が「無回答」の者、性別で「その他」を選択した者を分析対象から除外。「生涯の性交相手が同性、または同性および異性の男

性」を MSM、「生涯の性交相手が同性、または同性および異性の女性」を WSW と操作的に定義して、MSM、WSW、MSM を除く男性（以下、男性）、WSW を除く女性（以下、女性）をそれぞれ抽出した。サンプル数の偏りを考慮して、MSM、WSW、男性、女性の 4 群を対象に年代毎の差異を確認し、10 代から 30 代の一般男女（男性および女性）を中心にその特徴を検討した。

## 調査 2：クリニック介入調査

対象者が回答した性別および性的指向を採用し、男性、女性、ゲイ・バイセクシュアル男性（前述男性、女性、レズビアン、バイセクシュアル女性、アセクシュアル、X ジェンダー以外）の 3 群を対象に年代毎の差異を確認しながら、動画視聴の感想をみた。さらに、HIV/STI の症状や治療に関する知識、感染予防行動に関する認識について視聴前後の変化を分析し、介入動画の効果と課題を明らかにした。

**研究 4：**36 自治体の教育委員会や校長会、校長協会、教員の研究団体などを通じて教員に研究参加を呼びかけた。アンケート協力をお願いの文書を配布し、校務パソコンあるいはスマートフォンやタブレット端末から回答する無記名自記式質問票調査を実施した。学校ごとに固有の URL を伏すことによって学校を単位にした回収率の算出が可能のように工夫した。

（倫理面への配慮）

研究者所属施設の研究倫理委員会による研究計画の審査・承認を得たうえで、研究を実施した。

## C. 研究結果

**研究 1:**1) 2018 年は梅毒の年間患者数が 6,000 人を突破した。（正解○）では、動画視聴あり群の男性で 51.3%の、女性で 58.7%の上昇が確認された。一方、動画視聴なし群では男性で-1.0%、女性で 6.0%の変化があった。

2) エイズにかかるとすぐに死ぬ（正解×）

動画視聴あり群の男性で 15.3%、女性で 17.3%の上昇があった。動画視聴なし群では男性-2.0%、女性-1.0%の変化であった。

3) HIV 抗体検査では、女性の場合は内診（膣の検査）がある（正解×）

動画視聴あり群の男性で 54.7%、女性で 63.3%の上昇があった。動画視聴なし群では男性-2.0%、女性 2.0%の変化であった。

4) HIV 抗体検査では、男性の場合ペニスの検査がある（正解×）

動画視聴あり群の男性で 48.7%、女性で 65.3%の上昇があった。動画視聴なし群では男性では 0%、女性で 2.0%の上昇と大幅な変化がなかった。

5) コンドームを持ち歩くには財布に入れておくのが最も良い（正解×）

動画視聴あり群の男性で 22.7%、女性で 23.3%の上昇があった。動画視聴なし群では-4.0%、女性で 2.0%の上昇と大幅な変化がなかった。

6) 選び方次第でコンドームを使ったセックスはもっと楽しく出来る（正解○）

動画視聴あり群の男性で 34.0%、女性で 25.3%の上昇があった。動画視聴なし群では男性で-3.0%、女性で 3.0%の変化にとどまった。

**研究 2：**（研究 1）773 件の回答があり、有効回答数は 741 件であった（有効回答率 95.9%、大阪 364 件、札幌 377 件）。男性 418 名（56.4%）、女性 323 名（43.6%）、年齢は平均 22.3 歳で 10 代が 15.1%、20 代が 80.6%であった。

知識：「HIV 検査では膣／ペニスの診察がある」では正解率が 25%に届かず、全体の半数が「エイズにかかるとすぐに死ぬ」と誤解、76.9%が「迅速検査」の存在自体を知らず、これらの傾向は昨年度と同様であった。大阪では「エイズにかかるとすぐに死ぬ」のみ男女とも 5 ポイント以上低下していた。

性行動：過去 6 か月間にセックス（膣性交、アナルセックス、オーラルセックス、相互マス

ターベーション) 経験ありの割合は札幌 72.1% (男性 74.2%、女性 69.4%)、大阪 71.2% (男性 73.1%、女性 68.7%) であった。うち約 6 割が複数のセックスパートナーを有していた。過去 6 か月間のコンドーム使用状況(膣性交時)では、常用率は札幌 39.0%、(男性 44.7%、女性 29.9%)、大阪 46.2%、(男性 50.4%、女性 40.4%) であり、いずれの地方も女性が男性に比べ低かった。これらの特徴は昨年度とほぼ同傾向であった。

受検行動: 生涯の HIV 検査受検率は札幌 6.6% (男性 6.5%、女性 6.9%)、大阪 6.3% (男性 4.0%、女性 9.2%) であった。札幌は昨年度から約 1% 低下したがほぼ同様であった。大阪は男性が約 5% も低下していた。

(研究 2) のべ 527 名 (男性 333 名、女性 194 名) の参加が得られた。平均年齢は 23.7 歳 (SD=4.6) で 8 割が 20 代であった。ゲーム参加後の評定 (5 件法) では「コンドームについて、避妊だけではなく性感染症予防という目的も意識しようと思った」の平均評定値がゲーム A で 4.5 (SD=0.8)、ゲーム B で 4.2 (SD=1.0) など、肯定的評価が得られた。

### 研究 3: 調査 1: 自治体質問紙調査

有効回答数は 25,701 件 (89.9%) で、このうち 10~30 代は 68.7% を占め、10~30 代の性別の内訳は、男性 47.0%、女性 29.7%、MSM 21.2%、WSW 2.1% であった。いずれかの性感染症に罹患したことのあるのは男女全年代で 4,335 人 (21.8%) おり、なかでも女性の罹患率 (29.5%) が突出しており、20 代の約 3 割に罹患歴があった。このようななか、「インターネット」によって性交相手と出会った人の割合は男女ともに 23.0% に上り、なかでも 10 代女性は 103 人 (34.7%) と高率であった ( $p < 0.05$ )。性交時に「毎回コンドームを使用している」人は、男性 28.3% に比して女性 20.7% と低率で、特に 30 代女性は 17.1% であった。10 代 (61.6%)、20 代 (60.4%) の女性の半数以上が「(過去 6 か月間の) 性交相手とのコンドーム使用に関する

話題にしている」一方で、16.2% の女性が「つけて (つけよう) って言えないから仕方ない」と使用をあきらめていた。また、一般男女全体の「コンドームを使用しない理由」で最も多いのは「コンドームを使わない方が一体感がある」であった ( $p < 0.05$ )。「(過去 6 か月間の) コンドーム所持率」をみると、約 3 割の男性が常時所持していた。一方、20~30 代の女性の所持率は顕著に低く、5 割以上の女性が持っていなかった ( $p < 0.01$ )。

### 調査 2: クリニック介入調査

回収数 150 件のうち、男性、女性、ゲイ・バイセクシュアル男性の計 141 件を分析対象とした。パラパラ漫画を用いた 2 分間の介入動画の長さや表示スピードについて、8 割以上は「適当」であると回答し、20 代、30 代男女の 5 割以上より「親しみやすい」「安心できる」などの感想があった。動画の内容が「役に立った」「まあまあ役に立った」と回答した人は男性、女性、ゲイ・バイセクシュアル男性の全ての群で 8 割を超え、30 代男性と女性の全年代において 5 割以上が「役に立った」と答えた。そして、男女共に「予防のために、コンドームの常時所持が必要である」と考える人が増加し、特に 30 代男女において顕著な増加を認めた ( $p < 0.001$ )。また、「この 5 年間で、20 代の女性の梅毒感染者数が急増した」「セックスの時、コンドームを使うように相手に働きかける (断る) セリフがイメージできる」の 2 項目は、性別を問わず知識の獲得がすすんだ ( $p < 0.005$ )。

研究 4: 配布数 67,960 件、回答数 22,392 件、有効回答数 21,634 件、有効回収率は 31.8% であった。

- ・「スカートをはきたがる男子児童生徒/スカートを嫌がる女子児童生徒がいた」32.3%、「同性愛と思われる男子児童生徒がいた」13.5%、「同性愛と思われる女子児童がいた」11.9% であった。
- ・教育現場で教える必要性は、「男女の体の違い」

「第二次性徴」「妊娠・出産」といったこれまで学校でも取り組まれてきた項目に加えて、「薬物乱用」「性感染症」「HIV/AIDS」は9割を超える教員がその認識を示したが、「性別違和や性同一性障害」はそれを少し下回り、「同性愛」は最も低率で地域によっては6割後半台の認識であった。

- ・「同性愛」について授業に取り入れた経験は全体で14.6%、「性同一性障害」は15.5%、教える必要性を感じている教員が少なくとも6割は存在するにも関わらず実際の教育現場の取組にはつながっていないことが示された。
- ・性的指向は選べるという認識を持つものは47%、わからない者は24.2%であり7割以上に誤解あるいは知識の不足があることがわかった。

#### D. 考察

**研究1**：介入指標である6項目すべてにおいて介入を行った動画視聴あり群においてのみ有意な変化が認められた。コンテンツは男女共通のものとして2分間におさめた。動画サイトの視聴に親和性が高いと考えられる若者にとって、2分間が長く感じられるのではないか後半の動画内容について十分な記憶が残らないのではないかと等杞憂したが、十分な効果が確認できた。強調したい必要な情報は大きな文字で太字のテロップ（字幕）や効果音を活用し、コンドームケースやコンドームの種類やサイズの多様性についても、実際の製品を紹介することで現実的な選択肢の多さを示すことが出来たといえる。

**研究2**：研究1では、クラブ利用の若者の多くが複数のセックスパートナーを有しながらコンドーム常用率が低いこと、また、HIV/STIの正しい知識や関心を有していないことが明らかとなった。特に、若年層・女性に対しHIV/STIの基本的知識を向上させる介入が必要である。女性のコンドーム常用率が低いことが懸念されるがこの点は女性のみならず男性に対する意

識・行動の変化を促す介入が併せて重要である。研究2では性的に活発な繁華街の若者男女をターゲットとするクラブコミュニティを巻き込んだ予防啓発介入手法の開発に成功した。予防意識の定着を図るため、一過性に終わらず今後も繰り返し、同ターゲットに啓発を届けることが必要である。

**研究3**：本研究は、HIV/STIの知識の普及および検査受検勧奨の推進を図るため、まず、その実態を探るべくA府またはA市自治体においてHIV/STI検査を受検した人を対象に質問調査を実施した。そして、今年度を含む過去3年間の調査結果より、性感染症の動向を正確に伝え注意喚起し、性感染症の正しい知識と予防としてのコンドーム使用を啓発する必要があると考え、若者に馴染みやすいパラパラ漫画を用いた介入動画を作成した。この結果、視聴の感想には、20代、30代の半数以上から「親しみやすい」「安心できる」との回答を得た。さらに、男女共に性感染症の動向として「梅毒感染者数の急増」に関する知識の獲得がすすみ、「HIVを含む性感染症の予防のためにはコンドームの常時所持が必要である」という認識の変化を認めた。ただし、2分間の視聴覚教材では伝えられる情報が限られる。そのため、動画の最後に『HIV検査・相談マップ』へアクセスできるような工夫を講じた。これによって、それぞれのニーズに合わせてより詳細な知識と受検方法、治療法、支援などの情報提供に繋がることを期待したい。

**研究4**：人口規模から言えば性別違和や性同一性障害かもしれない者の存在は0.5%、レズビア・ゲイ・バイセクシュアルはその10~11倍である5%強と国内研究によって示されているが、学校現場で教員の目につくセクシュアルマイノリティの存在は圧倒的に性別の違和感を持つ児童生徒であることが示された。また、授業で教える必要性について「男女の体の違い」「二次性徴」「薬物乱用」「性感染症」「HIV/AIDS」などは

回答者の 9 割がその必要性を認識していたが、「性別違和や性同一性障害」はそれらをやや下回り 85.7%、「同性愛」はさらに低く 74.7%であった。この傾向は 2011 年調査とほぼ同様であった。

授業で取り入れた経験は 2011 年調査では 13.7%であったが本研究では 14.6%とほぼ同程度であり、教える必要性の認識割合は微増であることがわかったが、実際に授業で取り入れた割合はほぼ変化がなかった。性的指向や性自認に関する知識や態度についてだが、性的指向は選択できるという捉えは以前とほとんど変化がなかった。

## E. 結論

**研究 1:** 2 分間の予防啓発動画の効果評価で一定の効果が検証され、若者にとって印象に残る予防啓発の一手法であることが示された。

**研究 2:** 横断研究では同地域で 2~3 年間のデータをj得ることでデータの信頼性と今後必要な介入ポイントに関する確かな知見を得ることができた。介入研究では、個人レベルを超え集団レベルでセイファーセックスへの意識や行動を促進することができた。繁華街の若者の性的リスクは高く、予防啓発介入の継続が必要である。

**研究 3:** 近年、性交相手との出会いの方法は多様化し、新しい出会いの機会を容易に得ることができる仕組みが広がっている。このようななかにあつて、健康を守るための規範意識や性感染症に対する感染予防行動を高めるための啓蒙が急がれる。本研究では「病院(クリニック)」を情報発信の中核とし信頼感を得ながら知識を獲得、そこからインターネットを活用して、さらに個別のニーズに合わせた詳しい情報へアクセスできる仕組みを構築することができたと考ええる。

**研究 4:** 国内最大規模の性的指向と性自認の

多様性に関する教員調査を実施した。HIV/STI 予防啓発をはじめとして健康教育の実施にあたっては、性的指向と性自認の多様性に配慮した教育が求められその基礎資料の整備につながった。

## F. 健康危険情報

なし

## G. 研究発表

研究代表者

日高 庸晴

### 1. 論文発表

(和文)

1. 日高庸晴: ゲイ・バイセクシュアル男性の生きづらさと健康リスク行動, モダンフィジシャン, 新興医学出版社, 2019 年 5 月号: 475-477, 2019.
2. 日高庸晴: 性指向と性自認の多様性を知るー LGBTs の生徒の存在に配慮するために, 英語教育, 大修館書店, 68(1): 76-77, 2019.
3. 日高庸晴: 社会調査が示す LGBTs における DV と性暴力被害の現状, 地域保健, 東京法規出版, 2019 年 9 月号: 28-31, 2019.
4. 日高庸晴監著: LGBTQ をはじめとするセクシュアルマイノリティ授業, 少年写真新聞社, 2019.
5. 日高庸晴: 多様性が尊重される社会を, 手話通訳問題研究, 全国手話通訳問題研究所, 151: 6-7, 2020.
6. 日高庸晴: LGTBs の学齢期におけるライフイベントとメンタルヘルス, ストレス科学, 日本ストレス学会, 印刷中, 2020.

### 2. 学会発表

(国内)

1. 日高庸晴: 性的指向と性自認を視野に入れた教育が必要になる根拠: 第 38 回日本思春期学会総会・学術集会 シンポジウム(2)「LGBT を人権の視点からどう教えるか」, 2019, 東京.

2. 合田友美, 日高庸晴: クリニックで性感染症検査を受検した男女の性感染症に関する認識—CSW と非 CSW の違いに着目して—: 第 38 回日本思春期学会学術集会, 2019, 東京.  
(海外)

1. Tomomi Goda, Yasuharu Hikada: Reasons for condom use or nonuse among individuals undergoing sexually transmitted infection examination in Japan: The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, 2020, Osaka.

#### 研究分担者

松高 由佳

1. 論文発表  
(和文)
  1. 松高由佳・大塚泰正・飯田順子・藤 桂・津野香奈美他: 性的マイノリティへの適切な対応を促進する研修プログラムの留意点—産業保健スタッフ対象の研修に関する検討—  
総合保健科学, 36, 2020, 印刷中.
2. 学会発表  
(国内)
  1. 大塚泰正・松高由佳・津野香奈美・藤 桂・堀口康太他: セクシュアル・マイノリティへの理解と支援を促進させるための研修プログラムのパイロットスタディ、第 26 回日本産業精神保健学会, 2019 年, 東京.
  2. 津野香奈美・大塚泰正・藤 桂・松高由佳・飯田順子他: LGBT 等の性的マイノリティ労働者における暴力の経験と精神的健康状態、第 26 回日本行動医学会学術総会, 2019 年, 東京  
(海外)
1. Tomomi Goda, Yuka Matsutaka, Yasuharu Hikada: Reasons for condom use or nonuse among individuals undergoing sexually transmitted infection examination in Japan. The 6th International Nursing

Research Conference of World Academy of Nursing Science. 2020, Osaka, Japan

合田 友美

1. 論文発表  
本テーマに関する発表論文はありません。
2. 学会発表  
(国内)
  1. 合田友美, 日高庸晴: クリニックで性感染症検査を受検した男女の性感染症に関する認識—CSW と非 CSW の違いに着目して—: 第 38 回日本思春期学会学術集会, 2019, 東京.  
(海外)
1. Tomomi Goda, Yasuharu Hikada: Reasons for condom use or nonuse among individuals undergoing sexually transmitted infection examination in Japan: The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, 2020, Osaka.

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

なし